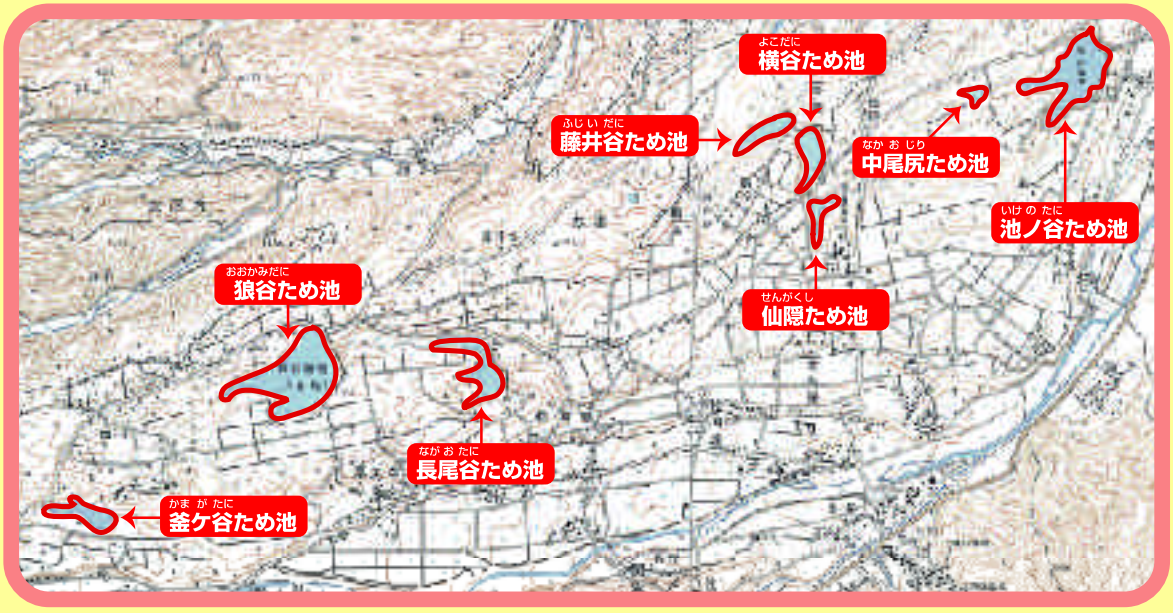
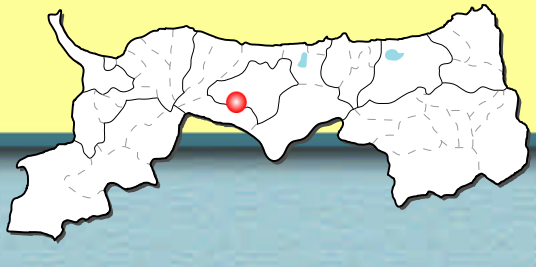
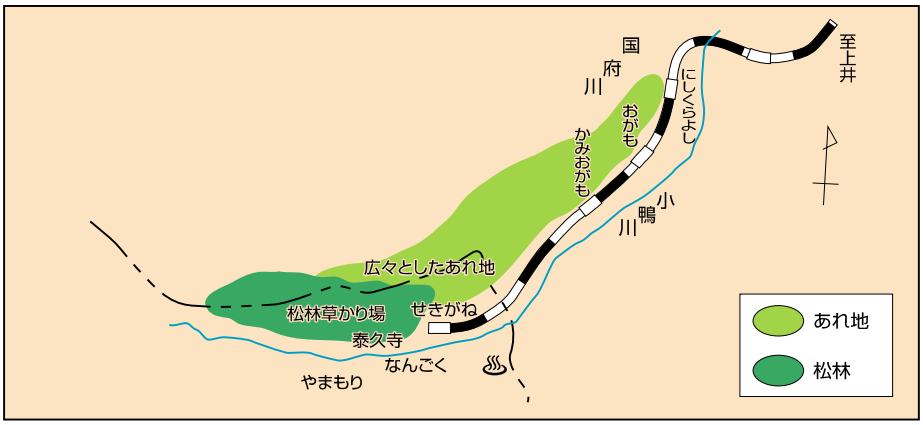
狼谷ため池

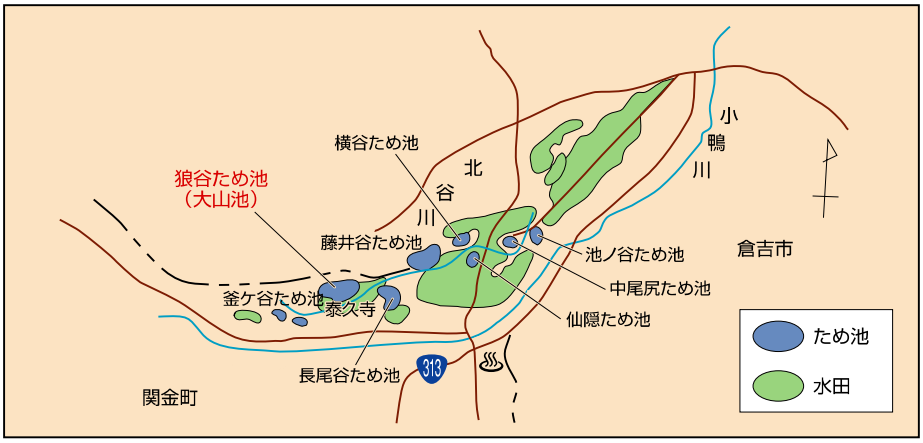
（鳥取県東伯郡関金町）







開発前の天神野台地



完成後の土地利用

天神野のいま

大山のすそのに広がる、広い台地の東の一角に、関金町と倉吉市にまたがる天神野台地があります。その広さは、およそ3,000ヘクタールの広大な台地です。きれいにほ場整備された水田、そして水田をうるおす水路網も整えられ、まわりの傾斜地は果樹園に利用されています。地域の人たちはこの広大な台地を「開田」と呼んでいます。そして、この台地にはいくつもの新しい村が点在しています。

天神野台地は、明治の終わりごろまで草木のおい茂る雑木林でした。この広大な原野を見事な水田につくりかえた先駆者が、関金町泰久寺の山根愛吉でした。

愛吉の夢

山根愛吉は、南谷村泰久寺（現在の関金町泰久寺）の人で、農業に大変熱心な人でした。愛吉の家にはたくさんの田や畑があり、牛を飼っていたので絶えず米づくりや牛の飼い方について研究していました。

そのころの天神野は、松林やところどころ日当たりのよい場所に桑畑や柿畑があるくらいで、ほとんどが広々とした荒れ地でした。愛吉の家も、この天神野の七石ヶ平というところに2、3町歩（ヘクタール）ほどの荒れ地があり、牛の餌の草刈り場にしていました。愛吉はこの七石ヶ平で草刈りをしながら、「この広い草刈り場を水田にすることはできないものだろうか」と考えていました。そして、七石ヶ平の谷間をせき止めてため池をつくることを思いつきました。しかし、どうしたら水をためることができるのか分かりませんでした。そこ

↑天神の台地に立つ愛吉のすがた

現在の狼谷ため池

で愛吉は、鳥取県庁へ相談に行きました。

１９１３（大正２）年に県庁から松崎という技師が、七石ヶ平の調査にやってきました。そして松崎技師は、天神野にため池をつくることに賛成しました。そのうえ、七石ヶ平だけではなく、広い天神野全体を開墾して何百町歩もの水田をつくる提案をしました。これに先立ち、１９０９（明治４２）年にはこの計画を確実に進めるため、愛吉みずから必要な技術を身に付けなければと、北海道にわたって現地の開拓作業にたずさわりました。

梨の花が満開の梨園

思いがけない抗議

１９１３（大正２）年には、天神野に関係する南谷、北谷、山守、上小鴨、小鴨、社の６か村の村長が集まり、第１回の開拓準備会が開かれました。松崎技師から、水は小鴨川の水をせき止めて明高付近から引き入れて、ところどころにため池をつくれば、天神野の荒れ地に３００ヘクタールから４００ヘクタールの水田ができると説明がありました。そして、天神野耕地整理組合をつくって、天神野に土地を持っている人たちで開拓の仕事を進めることになりました。

ところが同じこの年、天神野開拓の計画を知った小鴨川下流にある北条水利組合の人たちが、小鴨川の上流で天神野に水を引くことに強く反対しました。北条の人たち

収穫された梨

開発によってできあがった水田（1929（昭和4）年頃）

は、夏の日照りのときには水がなくてこまるのに、天神野に水を引かれては北条に流れてくる水の量が減ってしまうと考えたのです。

しかし、北条に流れる水の量に変わりはなく、これからたくさんのため池がつくられることにより、一年中の水がためられるようになり、夏が来ても今までの年より多く水が流れ込むようになるという説明で、北条水利組合は納得しました。

上空から見た狼谷ため池とその周辺

益田伝吉の苦心

天神野台地での田植えのようす

開墾作業が、大変な難工事であったということはいうまでもありません。試験田をもうけて稲をつくってみても、日照りが続くと枯れてしまいました。天神野を水田として拓くには、今まで考えていたよりも多くの水が必要であることが分かったのです。工事費用の問題もあり、組合は解散したのも同じでした。しかし、もう一度考え直して水の取り入れ口を多くしたり、ため池をつくる計画が立て直されました。

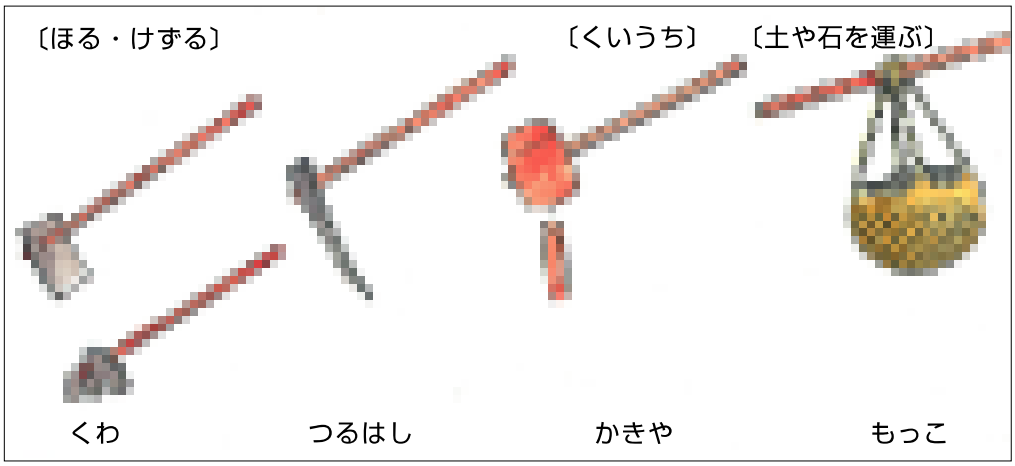
１９２１（大正１０）年に、東郷村田畑（現在の東郷町田畑）の益田伝吉が新しい組合長となり、むずかしい天神野開拓の仕事に取り組むことになりました。伝吉の努力によって工事の費用も見通しがたち、工事は再び順調に進んでいきました。しかし、全てが順調に進んだわけではありませんでした。

ため池工事の写真（1922（大正11）年頃）

入植の人々

こうして１９２１（大正１１）年には、一番大きな工事といわれた狼谷ため池(現在の通称大山池)の工事が始められました。この頃の工事は、ほとんどが人の力で行われ、石や土を運ぶ時にはなわで編んだモッコや、クワなどが使われました。工事の費用は、およそ８万６千円（現在の金額でおよそ４億３千万円）かかり、２年後に完成しました。その後、１９５３（昭和２８）年までに４つのため池がつくられました。全部で８つあるため池は、上流からの水をそれぞれ受け止めて、水を無駄なく使う工夫がなされています。

天神野への入植は１９２１（大正１０）年から始まり、地元の人たちのほかに西伯郡や気高郡、そして八頭郡など県内各地から集まってきました。人々は、田んぼに稲



工事に使われた道具

の穂がたわわに実ることを夢見ながら借金で田んぼを買ったり、地主から田んぼを借りたりして稲作にはげみました。

益田伝吉は、２５年間組合長をつとめました。その間、天神野開拓の先駆けとして生涯をささげた山根愛吉とは、お互いを助け合ったなかだと伝えられています。天神野に生きる多くの人たちは、愛吉を「天神野開拓の祖」、伝吉を「開拓の父」とたたえています。

ため池の水で育ったキャベツ

天神野に移住した人の家（1925（大正14）年頃）

年に一度の池干しに集まった人たち

池干しでたくさんのフナやコイが取れます